

昭島礼拝 2020/10/18

聖書：ヨナ 1:4-10

主題：どこの国の者

賛美：

みなさん、おはようございます。私たちは今、日本に住んでいます。そして現在、昭島教会の礼拝に参加されている方々は日本の国籍を持っておられる方がほとんどかもしれません。昭島教会の歴史を振り返れば、外国籍をもっておられる方々の出席もたくさんあったようです。国際化が進んでいますので、今後も外国籍を持っておられる方がたくさん出席されるかもしれませんね。国籍というのは、今は当たり前のように制度化されていますが、割と新しい制度のようですね。18世紀のフランス革命以降、国民国家という概念が誕生してから国籍という制度も作られてきたようです。自分はどこの国の者なのか？というアイデンティティです。普段、自分の国で暮らしている場合にはあまり意識しないかもしれませんが、基本的には国籍を持つ国以外の国の政治に参加したり、住むための土地を購入したりということは難しいです。私も少し外国で暮らしましたが、その時初めて自分の国籍というものを強く意識しました。VISAとかですね、そういうちゃんとした審査を通らないと、基本的には外国に住んだり、働いたりできないのです。また万が一、外国で被害を被った場合、自分の国が自分を守ってくれるという保証もあります。日本国籍を持つものでしたら、外国でトラブルにあったときは日本大使館や領事館に連絡します。国籍って大事ですね。今日、開いていただいた聖書箇所には、ヨナがどこの国の者かと問いただされる場面があります。ヨナは何と答えるでしょうか。そして私たちは何と答えるでしょうか。ともに考えてまいりましょう。

先々週から旧約聖書のヨナ書を開いております。ヨナは神様に仕える預言者でした。神様からの言葉を預かって、民に伝えることが仕事です。神様はヨナに言いました。「立ってあの大きな都ニネベに行き、これに向かって叫べ。(1:2)」ニネベというのは、アッシリアの国の首都でした。アッシリアは当時、大きな力をつけてきた大国で、イスラエルの地域も狙っていました。いわばヨナたちイスラエルの国の人間にとっては敵の国です。神様はヨナに、敵の国であるアッシリアの町に行って、悔い改めるように勧めなさいと告げているのです。ヨナはこの神様からの言葉が気に入りませんでした。後からヨナはその理由を語っていますが、ニネベの町で神様の言葉を語ったら、きっとニネベの町の人は悔い改めて、そして神様はそれを見てニネベの町を救うだろうと思ったのです。ヨナはそれが気に入りませんでした。そこでヨナはどうしたかということ、神様に面と向かって抗議したのではなく、主の御顔を避けて、他の町であるタルシシュという町に行こうとしました。今日はそのお話の続きになります。

ヨナはタルシシュ行きの船を見つけて船賃を払い、船に乗せてもらいました。船は港を出て、沖へ向かいました。1:4には「ところが、主が大風を海に吹きつけられたので、激しい暴風が海に起こった。それで船は難破しそうになった。」とあります。神様が強い風を送りました。船が壊れるかもしれない。というくらいの暴風を送ったので、船乗りたちは慌てました。ヨナはどうしていたかということ、船底でぐっすりと眠っていました。激しい暴風で船もぐらぐら揺れていたのだと思うのですが、よく寝ていられるなどと思います。この暴風はとも船乗りたちの手に負えるものではありませんでした。船長が船底におりてきてヨナに言います。「よくこんな時に眠り込んでいられるな。激しい暴風で船が難破しそうなんだ。お前も自分の神様に助けてくれるように祈ったらどうだ。」というわけですね。なかなか信心深い船長ですね。船で海に出るということは、陸上で生活しているよりも、危険が多いのかもしれませんが。そして人間の力で

はどうしようもないこともたくさん起こるのでしょう。それで船乗りや船長たちも自然と神々を信じるようになったのかもしれませんが。ただ聖書の教える真の神様、主は知らなかったようです。一方のヨナですが、ヨナはこの時、神様に祈れない事情がありましたね。主の御顔を避けて、この船に乗ったのです。神様と向き合いたくない。神様と話したくない。神様に祈りたくないからこの船に乗ったのです。いつものヨナだったら自然と神様と会話し、いつでもお祈りしていたかもしれません。しかしこの時は神様に祈れない事情がありました。

船乗りたちはとうとう、くじを引き始めました。この暴風があまりにも人の手に負えないので、これは何らかの神々の仕業に違いない。この船の中にだれか事情を知っているものがあるはずだと思ったのでしょう。神様はこのくじをも用いられました。くじはヨナに当たります。そして人々はヨナに問います。そこで彼らはヨナに言った。「話してくれ。だれのせいで、このわざわいが私たちに降りかかったのか。あなたの仕事は何か。どこから来たのか。国はどこか。どの民の者か。(1:8)」ヨナはどここの国の人間か?と問いただされました。

ヨナは何と答えたのでしょうか。『ヨナは彼らに言った。「私はヘブル人です。私は、海と陸を造られた天の神、主を恐れる者です。」(1:9)』私は「ヘブル人です。つまりイスラエルの人間です。そしてイスラエルの神様は海と陸を造られた天の神、主です。私自身も主を恐れる者です。」とヨナは答えました。ヨナは預言者ですから、おそらくこの自己紹介の仕方を何度となく外国の人に説明してきたことでしょう。神様のことを説明するにあたり、「海と陸を造られた天の神、主」とヨナは答えました。この答えにはヨナの自信と言いますか誇りのようなものが感じられます。自分は主に仕える預言者だ。自分が仕えている神様はあの山の神とか、あの川の神とか、あの海の神とか、そんなレベルではない。海で大変な目にあったとき、山の神は助けに来れない。山で大変な目にあったとき、海の神は助けに来れないかもしれない。でも自分が仕えている主は、あの海もこの山も川も陸地も全部造られ、今も天からご支配されている神様だ。

主がなしえないことは何一つないとヨナは誇りを持っていたでしょう。ですから、「あなたはどこの国籍の人ですか?どんな神を信じていますか?」と聞かれたら、「私はイスラエル人です。私が仕えている神様は、海と陸を造られた天の神、主です。私は預言者です。主の言葉を人々に伝えるのが私の使命です。私はこの仕事に誇りを持っています。」と言わんばかりの自己紹介です。

しかし今、この瞬間は、この自己紹介がとても空虚ですね。言葉の上ではとてもすごいことを語っているのですが、ヨナ自身が本当にそう思っているの?と逆に聞きたくなるような雰囲気です。だってそうですよ。あの山も、あの丘も、あの陸地も、あの海も、全部を造られて、天からご支配されている神様なら、その神様の御顔を避けるなんてできるの?一体全体ヨナはこの神様からどうやって逃げようとしたの?ということです。詩篇 139 篇にはこのような言葉があります。「私はどこへ行けるでしょう。あなたの御霊から離れて。どこへ逃れられるでしょう。あなたの御前を離れて。8たとえ 私が天に上っても そこにあなたはおられ 私がよみに床を設けても そこにあなたはおられます。9私が暁の翼を駆って 海の果てに住んでも 10 そこでも あなたの御手が私を導き あなたの右の手が私を捕らえます。」この世界を造られ、今もご支配されている神様が、世界のすべてを把握してないということはありません。この世界のどこに行っても、そこは神様の場所です。そしてまた神様は私たちの思いをもすべてご存じです。「1主よ あなたは私を探り 知っておられます。2あなたは 私の座るのも立つのも知っておられ 遠くから私の思いを読み取られます。3 あなたは私が歩くのも伏すのも見守り 私の道のすべてを知り抜いておられます。4 ことばが私の舌にのぼる前に なんと主よ あなたはそのすべてを知っておられます。」このようなことを考えると、ヨナが主の御顔を避けて逃げようとしているというのは、なんとも滑稽です。ヨナはこのようなまことに大きな神様に仕えていることが誇りですと自己紹介してきたのですが、本当に神様のことを知っていたのですか?ということになってしまいます。

おそらくヨナ自身が、一番痛感したでしょう。この言葉を発しながら、「ああ。自分は何度こう自己紹介したかわからないけど、この言葉の意味を理解してなかったなあ。」と思ったに違いありません。言いながらだんだんと声が小さくなっていったかもしれません。詩篇 139 篇の最後はこう締めくくられています。「神よ 私を探り 私の心を知ってください。私を調べ 私の思い煩いを知ってください。24 私のうちに 傷のついた道があるかないかを見て 私をとこしえの道に導いてください。」すべてが神様に知られ、しかも神様がすべてをご支配されているのであれば、いっそこちらも神様にすべてを明け渡したほうが良い。神様はあわれみ深く、私たちを愛し、正しい道へと導いて下さる神様です。ですから私たちがすべてをお明け渡したとき、神様がすべてを良い方向へと導いてくださいます。ヨナは自分の国を問われ、そのことを自覚し、自分を神様にもう一度ゆだねることにしました。自分は神様の国の民だった。もう一度ちゃんと神様に立ち返り、神様に従おうと思ったことでしょう。

ヨナは神様の国の民です。私たちも神様の国の民です。聖書はイエス様が十字架によって私たちを贖い、神の国の民としてくださったと教えています。神様の国の民になったのですから、神様がすべての責任をもって、私たちを守り導いてくださいます。私たちも詩篇 139 篇のように、主の御顔と向き合って、神様にすべての思いを知っていただきましょう。神様はそのすべての思いをことごとく知って、受け止めてくださって、ふさわしい道を備えてくださいます。